

細川ガラシア考

田中 裕

資料 1 1698年にウィーンで上演された音楽劇「Mulier Fortis（勇敢な婦人）」

二つの異なる世界（カトリックの精神世界と武士道の世界）を共に生きた細川ガラシアの思想と生き様は、これまで多くの人々の関心の的となってきたが、「ガラシア」の名前が、イエズス会の宣教師達の書簡によってヨーロッパのカトリック世界でも知られており、彼女を主人公とした物語が語り継がれ、音楽劇として1698年、オーストリアのウィーンで、ハプスブルグ家の皇帝レオポルド一世とその家族の前で上演されたことは、余り知られていない。この劇では、ガラシアは、キリスト教的な美徳の鏡であり、逆境にあっても不変の信仰を貫いた「丹後の国の勇敢なる王妃」として称賛されている。¹

ヨハン・ベルハルト・シュタウト作曲のこのオペラの楽譜が、ウィーン国立図書館に所蔵されていることがわかったのはごく最近のことで、上智大学の故トーマス・インモース教授の助言を受けたウィーン在住の新山カリツキ登美子氏が発見、その原譜を沖縄音大教授の豊田喜代美氏が校訂し、上智大学創立100周年記念事業のひとつとして2013年に紀尾井ホールで蘇演された。このオペラの脚本は、1627年にフランス人イエズス会士のフランソワ・ソリエがまとめた「日本教会史」がもととなっており、そのオランダ語版が1667年にオランダ人イエズス会士コルネリウス・アザルによってアントワープで刊行、さらにそのドイツ語版が1678年にウィーンで、「丹後の女王の入信とキリスト教的な美徳」というタイトルで出版されている。「丹後の王妃ガラシア」の物語は1838年にフランスでも公刊されているので、十九世紀初め頃までは、ガラシア(Gratia)の名前は、フランス、オランダ、神聖ローマ帝国で語り継がれていた。

資料 2 江戸時代の「細川忠興夫人」像

日本では江戸時代から明治初めまでは、細川忠興夫人が、「ガラシア」という洗礼名をもつキリスト教徒であったと云うことは知られていなかった。たとえば、寛文8年(1668)に儒者の黒沢宏忠が出版した「本朝列女傳」の「細川忠興孺人(孺人=身分高き人の夫人)」では、武士の妻の鏡として、貞女にして

¹ この音楽劇のタイトルはラテン語訳聖書、箴言 31:10にある理想の妻の描写に由来している。

Mulierem fortem quis inveniet? procul et de ultimis finibus pretium ejus. (LV) [勇敢な婦人を見いだすのは誰か?彼女の価値は遥か遠方より来る(真珠)よりも貴い]

ガラシアはこの劇の「エピローグ」で次のように頌えられている。

Magnanimam principem, Virtutis verae imaginem, Lapsi saeculi prodigium. Vide, vide hanc in Gloria, Hanc illi parta dedit Victoria. Vicit minas et catastas, Vicit flagra, vicit hastas, Vicit insanum, vicit furorem, Vicit tyrannum, vicit dolorem, Felici cuncta omine, Sacro pro Christi nomine.

気高き寛大な王妃、まことの美徳の鏡、墮落したこの世の驚異、栄光に包まれた彼女をご覧ください。彼女には勝利が待ち受けている。脅しと拷問に勝ち、鞭と槍に勝ち、狂気を克服し、残酷な忿怒に勝ち、暴君に勝ち、苦しみを受けながらすべては至福の前兆を伴い、キリストの御名に捧げられた。

列女（忠義の心をもつ気丈な女性）」として称賛されています。それによると、彼女は石田三成の使者に向かって、「源君之命東関に在り。我其の夫人なり。如何に秀頼に従はんや。盛衰を以て節を改めず。存亡を以て心を易えざるが武士の家法なり。偶々武士の家に生まれ、豈家法を辱めんや」と述べて、武家の作法に則って自決したと書かれている。「戦いに勝利するか敗北するか、その盛衰によって節を曲げずに、生きるか死ぬかの存亡の時にも心を変えないのが武家の法」というあたり、ここでは、忠興夫人は、「当代の節女にして、婦人でありながら義のなんたるかを知っていた」武家の妻の理想とも云うべき人物として称賛され、彼女を称える漢文の頌

「細川内室 當時節女 婦而有儀 克誦相聞² 視死如帰³ 侍女尚侶 子葉繁枝 世有誉処」が添えられている。

なぜ日本の儒教の学者によって「不変の忠誠心をもってサムライの家の掟を辱めなかった、貞女の鏡」と称賛され、ヨーロッパのカトリックの信仰の世界では「キリスト教的美徳と不変の信仰を貫いた聖女」として物語られてきたのであろうか。

ガラシアの内面の世界を知る手がかりとして、彼女が当時の大阪の修院長セスペデスにあてた書翰、彼女の愛読していた信心書である『キリストに倣いて』、当時のアヴェ・マリアの祈りの文言を手引きとして考察したい。

資料3 細川ガラシアのグレゴリオ・セスペデス大坂修道院長宛書翰 (ルイス・フロイス書翰(1588)に引用されている)

武田昨朝当地に参り、伴天連様、いるまん様方の御動静を拝聞仕り喜びに堪へず候へども、とりわけ、皆様残らず日本を御退去なさるるものに非ざる由を承り御同慶に堪へず候。

これによりて、妾も心に力を得、何れは当地方にもお戻りなされ、御面接を賜はる事もあらんかと希望を新たに致し候。妾の事につきては、伴天連様御存じの如く、吉利支丹と相成候儀は人に説得されての事にてはこれ無く、唯一全能の天主の恩寵により、妾自らそれを見出しての事に罷在り候。たとへ、天が地に落ち、草木が枯れはて候とも、妾の天主に得たる信仰は決して変る事無かるべく候。最も悲しみに堪へざることは、伴天連様への迫害により妾どもの受けし不幸にて候。されどこれによりて、よき吉利支丹としての信仰があかさるべきものと存ぜられ候。伴天連様方御退去の後、妾への苦難は絶えし事無之候へども、何事も天主の御助けにより御加護を受け居る次第に御座候。

二男(三歳の幼児)は一時重態を伝えられ、もはや恢復の見込無之候折、この幼児の魂の空しく失はれ候を憂ひ、如何にすべきかとマリアに相談仕り候処、最善の方法は御作者天主に一切を御委せするにしくはなしとて、極秘裡にマリアにより洗礼を授けヨハネと名づけ候。然るにまことに不思議にも、その日より快方に向ひ今日にては全く恢復仕り居り候。

戦争より御帰還後、越中殿には日常の御生活ことの外厳しく、妾の一子の乳母にて同じく洗礼を受けし

² この烈女傳には、細川忠興と夫人の間に交わされたと伝えられる相聞歌が収録されている。

なびくなよわが姫垣の女郎花 男山より風は吹くとも 忠興

なびくまじわがませ垣の女郎花 男山より風は吹くとも 玉

司馬遼太郎は小説『胡桃と酒』でこの相聞歌を朝鮮に出陣中の忠興が大阪の細川邸にいる玉子に送った歌としている。

³ 「死を視ること帰するがごとし」とは、故郷に帰るごとく平然と死に赴くことを云う。

(大戴礼 曾子制言上に拠る)

者を、些々たる過失によりてその鼻をそぎ、両耳を切り取りて屋敷の外に逐ひ出し候。それに引続き他の二人の侍女の髪も削り、三人共吉利支丹なるが故に逐ひ出され候。妾は注意深く、侍女どもに必要な品々を整へ、信仰を失はざる様に激ましやり申し候。

数日前、越中殿丹後領に行かれ候も、御出発に先だち、御帰還後は留守中屋敷内の様子を尋問致さるべき旨妾に申され候、これ天主の教に就いての事なるべく、又屋敷内にて吉利支丹となりし者に関する事ならんと懸念仕り居り候。

マリアと妾とはいかなる迫害が越中殿或は関白殿の何れより来り候とも既に覚悟を定め、その機に臨み天主への御大切の為に、いくばくかの苦難を致し得る事を喜び居る次第に御座候、伴天連様方の御動静を御伺ひ致し度きものと日夜念じ居り、我等の天主が再び皆様方を当地に御連れ戻し下され、妾を助け、妾の幼児を御導き下さる様あけくれ切望致し居り候。

機会にても有之候はゞ、皆様よりの御便り賜はる事御忘れ無き様、また御祈りと御ミサに於いて、妾のためにお祈り下さる様重ねて奉懇願候。妾と共にまかり居り候信者は皆信仰固く、殉教に就きては若しも斯く重大なる意義ある時を見出し候はゞ、皆の者に相勧め申すべく候。

資料4 1600年10月25日付の日本年報書翰が伝えるガラシアの最期

ガラシアの悲劇的な最期について、同時代の報告書として重要な一次資料は、Valetin Carvalho S. J. が編輯した1600年10月25日付の日本年報書翰 (British Museum, Additional manuscripts 5 859, ff. 138.-140.)。この記事を収録したGurreiroの冊子(1603)が上智大学のキリシタン文庫に保存されている。



「(細川忠興は) 諸将と共に内府様〔家康〕に従って関東の戦に赴いたのであるが、彼は家老小笠原殿以下家臣の者の監督に任せて、奥方と家族の者を〔大阪に〕残していった。越中殿は常にそうであるように、万事を名誉のために心がけていたから、家を離れるときには、いつも警備として残してある家老及び家臣に命じ、もし留守中に何か奥方の名誉に関する危険が勃発したらば、日本の習慣に従って、まず奥方を殺し全部の者が切腹して死を共にすべきであるとしてあった。このときにも同様の

ことを家来の者どもに命じたのであった。

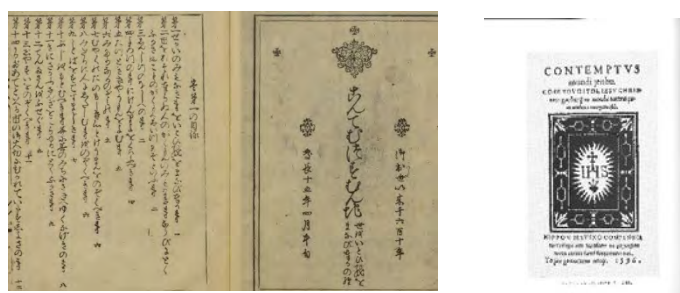
さて、そのあいだに奉行〔石田三成〕は越中殿の邸に使いをやって、留守の者に対して、本日より戦争が始められたから、殿の奥方ガラシア夫人を殿の将来の恭順の人質として引き渡すべしと命じてきた。これに対して家老等は奥方は絶対に渡せないと返答した。そこで奉行が手早く邸を包囲して奥方を

捕らえようとしていることを知ると、一同は奥方の名誉のために、殿の命令を実行しようとした。そして事態の急をいちやくガラシア夫人に知らせ、殿から命じられていることをそのまま申し上げた。奥方はさっそく、何時もきちんとして綺麗に飾られている礼拝所に行き蠟燭を点させ、跪いて死の準備の祈りを捧げた。ようやく、奥方は礼拝所からたいそう元気に出てきて、腰元どもを全部呼び集め、自分は殿の命令であるからここで死ぬが、皆の者はここを退去するようと言いだした。一同はそこを去るにしのびず、むしろ奥方と共に死出のお供をしたい希望を述べた。日本ではこういう場合、主人と死を共にするのが臣下の名誉であり、また習慣であったからである。ガラシア夫人は真に召使たちから慕われていたので、召使たちが死の供をしたいと望んだのであったが、奥方は無理に命じて邸の外に逃げさせた。その間に家老小笠原殿は家来共といっしょに全部の室に火薬をまき散らした。侍女達が邸を出てから、ガラシア夫人は跪いて幾度もイエズスとマリアの御名を繰り返しながら、手ずから（髪をかきあげ）頸をあらわにした。その時、一刀のもとに首は切り落とされた。家来達は遺骸に絹の着物を掛け、その上に更に多くの火薬をまきちらし、奥方と同じ室で死んだと思われる無礼のないように、本館のほうに去った。そこで全員切腹したが、それと時を同じくして火薬には火がつけられ（大爆音と供に）これらの人々と共にさしもの豪華な邸も灰燼に帰したのである。ガラシア夫人の命令によって邸の外に逃された侍女たちの外は、誰一人として逃れようとしたものはいなかった。これらの女達は泣きながら、ペアデレ・オルガンチノのもとにいて、この事件の一切を知らせた。その報知を得て、我々は非常に悲しみ、かくも人の鏡として、とくに改宗してからはまれにみる徳の高い高貴な夫人を失ったことを非常に悲しんだ」

（ヘルマン・ホイベルス神父『細川ガラシア夫人』資料篇の邦訳に従う）

主人の忠興の命に従って自決することが、名誉を重んじる当時の武家の妻と家臣の「法」であったということを当時の宣教師達が、的確に理解していたことを、上に引用した宣教師の書翰がよく示している。また、侍女達が殉死を願い出たときに、ガラシアがそれを決して認めず、邸の外に逃げさせたという記事が重要で、彼女が侍女達の殉死を決して許さなかったことを示している。結果として侍女達は、ガラシアの死の状況を後世に伝える証言者の役割を果たすことになった。

資料4 細川ガラシアの読んだ「キリストに倣いて」と「アヴェ・マリア」の祈り



プロテスタントとカトリックの区別を越えて聖書に次いでキリスト教徒によってよく読まれた本は「キリストに倣いて(imitatio Christi)」である。この書の日本語訳は、『コンテムツス・ムンヂ (contemptus mundi)』と題して1596年ローマ字で天草から、1610年国字で京都から出版された（後者は前者の抜粋改訂版）。ともにキリシタン文学の白眉と称せられるほどの優れた翻訳である。細川ガラシアが、国字で書かれた「キリストに倣いて」を座右の書としていたことが宣教師の書翰によって知ら

れる。たとえば、受洗する前の頃、「細川忠興の奥方」について、ルイス・フロイスは次のようなエピソードを伝えている。

「奥方〔細川忠興夫人〕は司祭達に、デウスの教えについて関心をいっそう深めていきたいので、御身等の手元にある日本語に訳され、日本の言葉で書かれている靈的な書物を是非とも送っていただきたいと願った。司祭達が当初、『コンテムツス・ムンヂ』を贈ったところ、彼女はそれがいたく気に入り、片時もその書を身から放そうとせず、我らヨーロッパの言語に出てくる言葉とか未知の格言について生じる疑問をすべて明瞭に書き留め、侍女のマリア〔儒者清原枝賢の娘で已に洗礼を受けていた〕にそれをもたせて教会に使わし、それらに対する回答を自分の所にもって帰らせた。奥方の文字は日本できわめて稀なほど達筆であり、彼女はそのことできわめて名高かったから、彼女は後に自筆でもって他の靈的な書物の多くを日本語に書き写した」

この書のローマ字完訳本第二巻 12 章（国字本の第二巻第 9 章）のつぎの言葉に注目したい。

「尊き御クルス〔十字架〕の御幸の道〔王道〕のこと——天の御國に至る道となるクルス〔十字架〕を請け取り奉る〔自分の責任として引き受ける〕ことを何とて恐るぞ。クルスに息災〔救い〕と寿命〔生命〕があり、敵を防ぐご擁護〔庇護〕もクルスにあり。天の甘味〔至福〕クルスにあり。アニマ〔心〕の強勢勇氣〔堅忍不拔の心〕もクルスにあり。歓喜悦予もクルスにあり。善徳の極めもクルスにあり、外になし。かるが故にクルスを担げてゼズ・キリシト〔イエズス・キリスト〕を慕ひ奉れ。不退の命〔永生〕に至るべし。キリシト先ず一番に先立ち給ひて御身のクルスを担げ給ひ、汝の為にクルスにて死し給ふなり。これ汝にもクルスを担げさせ、それにて死せんことを望ませ給ふべき為なり。その故は、キリシトともに死するに於いてはともに生き存ゆべし。辛苦の御友となり奉らば、天の快樂の御友たるべし。」

「キリストに倣って、十字架の道行きをすること、キリストが先に、あなたのための十字架を担われ、あなたのために死なれたのだから、そのキリストを慕いて、キリストとともに十字架の道を歩み、キリストと共に死し、キリストに於いてキリストと共に生きること、辛苦の御友は天においてかならず快樂（至福）の御友となる」という、「キリストに倣いて」からイグナチウス・ロヨラの「スピリツアル修行（靈操）」に受け継がれたキリスト教の根本テーマが、上の文に簡潔に要約されている。

細川ガラシアが、「死が不可避であった状況にもかかわらず、細川邸から逃げ出して、命を永らえる道を選択せずに、自分の命運を自ら引き受けた理由」を考える場合、今引用した箇所後に続く次の文が非常に重要な関わりを持っているので、次にそれを引用する。

「一つのクルスを捨つるに於いては、また別のクルスに遭ふべきこと疑いなし。もしくは猶勝りて重きクルスもあるべし。人として一人も遁れざるクルスを汝一人逃れんとするや。善人たちのうちに何れか難儀クルスを遁れ給ひしぞ。我らが御主ゼズ・キリシトも御在世の間、実に一時片時もごパッション（受難）のご苦痛を遁れ給ふことなかりしなり。その故は、キリシト苦しみを凌ぎ給ふを以て、蘇り給ひ御身のゴロウリヤ〔栄光〕に入り給ひしこと肝要なり。しからば、汝何とて尊きクルスの道より外を尋ぬるぞ？ゼズ・キリシトのご在世中は、クルスとご苦患のみにてありしに、汝は寛ぎと歓喜を尋ねるや？」

秀吉が宣教師の国外追放令を布告しただけでなく、日本人の信徒を含む26名（そのなかには12歳の少年もいた）を残酷な形で人々の前にさらし者にして行進させ処刑した頃、細川忠興は自分の家に害が及ぶことを恐れ、ガラシヤに棄教を迫っていた。そのとき、ガラシヤは本気で細川忠興と離縁して、信者の侍女に残酷な虐待をした忠興と分かれるために細川邸を脱出することを考えていたことが、宣教師との書翰のやりとりから窺える。しかしながら、ガラシヤが細川邸を忠興に無断で脱出したと分かれば、忠興はかならずその手引きをした宣教師達を恨み、彼をキリシタン迫害の急先鋒にする危険があった。宣教師達はそのことをガラシヤに告げて、なんとか彼女の細川邸脱出を思いとどまらせようとした。離婚の意思の固かったガラシヤに対して、細川邸に止まって、その場所で自分の十字架を担う決断を促した言葉が、まさに上で引用した「一つのクルスを捨つるに於いては、また別のクルスに遭ふべきこと疑いなし」という「キリストに倣いて」の一節であった。

ガラシヤ一人が逃亡して身の安全を確保し、安穏な暮らしをむさぼることは、ガラシヤのために先に十字架の上で死なれたキリストのご恩を裏切ることになるし、その結果は、夫の忠興を（ガラシヤの父を殺し、26人の無辜のキリスト信徒を十字架に架けた）秀吉側にますます接近させ、多くのキリシタンたちを迫害する先兵にしてしまうという危険に気づいたのであろう。ガラシヤから相談を受けたオルガンチーノは「天主がお働き下されて、ついに天主への愛のために、彼女の担う十字架を抱くように決心させたのである」と書いている。（1589年2月24日の書翰）

死の直前に、ガラシヤは礼拝室でアベ・マリアとイエスの御名を称えて祈りを捧げたと記録にあるが、彼女の称えたとされるアヴェ・マリアはどういうものであったか、当時の教理入門書、ドチリナ・キリシタンは次のように、まさに「ガラシヤ（めでたし）」という言葉から始まる。

「ガラシヤみちみち玉ふマリアに御礼をなし奉る。御主は御身と共にまします。女人の中にをいてベネジタ〔祝福された女性〕にてわたらせ玉ふ。又、御胎内の御実にしてましますゼズス〔イエズス〕はベネジト〔祝福された男性〕にてまします。デウスの御母サンタ・マリア、今も我らが最期にも、我ら悪人のために頼み給へ。アメン」

避けられぬ死を前にして、ガラシヤは平常心を保ちつつ、常に明るい顔で落ち着いていたと宣教師の記録にある。この悦びに満ちた平静さはどこからくるのか。「キリストに倣う」道は「マリア讃歌」と一つになっていますが、アヴェ・マリアの祈りが、まさに「ガラシヤ」という祝福で始まり、「御胎内の御実であるイエス」と「天主の御母マリアへの祝福」であることに注意したい。ガラシヤは忠興とのあいだにたくさんの子供をもうけ、その子供のなかには忠興の了解を得て洗礼を受けた者も含まれていたから、彼女は細川家の妻としての務めを果たしつつ、忠興のキリスト教に対する偏見を改めさせたことが分かる。

忠興自身が改宗することは遂になかったが、アヴェ・マリアを称えることは、キリストの十字架を自分も担う事であると同時に、天主の御母マリアの祝福が、自分と息子達の上に（そして夫忠興のうえにも）与えられることを頼むオラショでもあったと思われる。

補足資料 音楽劇 *Mulier Fortis* で描かれた細川ガラシヤについて

音楽劇 *Mulier Fortis* の脚本は、イエズス会士コリネリウス・ハザードの教会史（1678）の「丹後の王妃の改宗とそのキリスト教的美德」の記述をもとにしているとはいえ、史実を反映したもの

ではない。例えばガラシアの殉教の日付を 1590 年 8 月とし（実際は 1600 年 8 月）となっており、関ヶ原の合戦以前にガラシアは、（自決ではなく）迫害による身体の衰弱でなくなり、その死によって越中殿が改心して、キリスト教の擁護者となったところで終わっている。

しかし、史実ではないにしても、殉教を主題とする創作としてみる限り、十七世紀の西欧のカトリック諸国の人たちのキリスト教的世界観がよく分かるという点で、Mulier Fortis という作品はなかなか興味深いものである。

ギリシャ悲劇ではコロス（歌舞団）の役割が大切であるが、それを摂取したキリスト教的受難劇では、コロスは、上演されるドラマの「想定された観客」の心を表現する役割を演じる。つまり、人格化された「不変 Constantia」「忿怒 Furor」「残虐 Crudelitas」「不安 Inquies」「後悔 poenitudo」の演ずる幕間のアレゴリーは、いずれもドラマを見ている観客の心の世界の葛藤を表現するものであり、このコロスによって遠く離れた国のキリスト者の殉教劇が、時代的地域的な制約を越える普遍性を獲得することがめざされている。

人格化された人間の情念を表すコロスだけでなく、そもそもこの劇の登場人物は「ガラシャ」（恩寵を人格化した人物でもある）、夫の「ヤクンドヌス（越中殿）」を除いて、原則として固有名詞では呼ばれず、王、王妃、王子 1、王子 2、娘 1、娘 2、キリスト者（高山右近がモデルか）、僧侶、などのように普通名詞で表現されている。こうすることによって、観客でもあったハプスブルグ家の王も王妃も王女達も、そこで上演されているドラマが、遠い異国の物語ではなく、自分たち自身の事柄でもあるというように、感情移入することができたであろう。要するに、この脚本は、遠く東の果の国に伝道されたキリスト教の殉教者の物語を、西のカトリック諸国のクリスチャンにも理解できるように形で上演することをめざして書かれていると云うこと、「普遍にして不変の信仰」を「はるか東方の国の王妃の殉教」という特殊な事件を素材にして劇化したということである。したがって、この楽劇の観客は、みな「丹後の王妃ガラシャ」が、「殉教の死」を迎えたことを理解したと思われる。

Mulier Fortis の中で、印象的な場面と台詞をいくつか挙げておこう。

まず、第一幕第二場、祭壇の前で祈るガラシアと息子達の場面に注目したい。突如大いなる地震がおきて、祭壇に安置されていた十字架が落下する。周章狼狽する息子達の前で、その落下した十字架を祭壇にもどしつつガラシアは次のように云う。

「それがどのような予兆であれ、キリスト者に相応しい高貴な心で耐えることができますように
 (quidquid rei portendat, illud mente generosa feram, ut christianam condecet)」

福音書の伝えるイエスの十字架上の死の場面をふまえて、「キリストに倣う」ガラシアが殉教の死を受け入れることが、ここで暗示されている。優れたドラマトロジーといえよう。

次に第一幕第五場、凱旋帰還する王による嵐のようなキリスト教迫害は避けられないことが分かったとき、逃亡を勧める家臣に対してガラシアの語る次の言葉は、この楽劇の根本主題に関わる重要なものである。

「王妃：その（迫害の）嵐の原因は何ですか？」「家臣：新しい信仰です」

「王妃：ああ何と祝福された罪でしょう！ 神の故に私が罪あるものとされるなら、苦境から逃れて私が自分の幸せだけを求めることは間違っています。ガラシャ（恩寵）は、勇敢に、この場所に、しっかりと立たなければい

けません。たとえ、地獄の門が開き、忿怒の群が私を襲おうとも、私の心は、神が見捨てたまわぬがゆえに、平安に満たされています。

(O culpa felix! Pro deo si sim rea, Non bene saluti consulam auxilio fugae. Hic esto fortis, Gratia, hic standum tibi! Tota solutes orcus, Eumenidum manu, In me recumbat; corde non tollet deum.)」

正確な史実を知らなかった *Mulier fortis* の作者であったが、上の台詞には、ガラシャと同時代を生きた宣教師達の書翰の内容が反映されており、「ガラシャがなぜ逃亡せずに死を受け入れたか？」その理由を、よく捉えていると思う。

補足資料 ガラシアの和歌と辞世

身を隠す野間の吉野の奥ふかく花なき峰に呼子鳥啼く⁴
逢ふとみる情けもつらし暁のつゆのみ深し夢のかよひじ⁵
逢ふと見てかさぬる袖の移り香ののこらぬにこそ夢と知りぬる
忘れむと思ひすてもまどろめば強ひて見えぬる夢のおもかけ
恋しともいはばおろかになりぬべしころを見する言の葉もがな
色ならば何れかいかに映つるらん見せばや見ばや思ふ心を

辞世

散りぬべき時知りてこそ世の中は花も花なれ人も人なれ⁶

ガラシャの書翰（小侍従にあてた自筆書翰）



⁴ 野間の吉野とはガラシアの幽閉された味土野で桜の名所でもあった。八幡山の城に置いてきたわが子の上に思いを馳せた歌として伝承されている。

⁵ 夢を詠んだ三首について、三浦綾子の『細川ガラシア』は、遇うことのかなわぬ夫忠興の夢を見たときの歌としている。

⁶ 「聖グレゴリオの家会報」外国語版で、この歌を

Knowing the providential time of falling,

In the midst of the world

Flowers become what they are,

The person becomes who she is!

と三行詩として英訳したが如何であろうか。